

中国地方山間盆地牛市の研究 (その2)

— 岡山県久世牛市の場合 —

石田 寛
佐藤 雄一郎

3 久世市を通じてみたる和牛の商圈

中国山地には多数の牛馬市場があったが、大きく二大別される。1つは地方的小市場で年間取引も数百頭を出ない小市場であり、他は産地の牛を取引するのみならず、他地域の牛の中継市場的な性格を持つ大集散市場で年間取引頭数も数千頭を数える大市場である。大山市を頂点とし千屋・高梁・久世・一宮(以上岡山県)、室生・根雨(鳥取県)、久井・吉田・十日市(以上広島県)、横田・三日市(島根)などはお互に関連性を保ちながら近隣の牛を取引きし、東は畿内南は四国西は九州方面まで牛を送り出していた大集散市場であった。開市回数は年間2回が普通であった。すなわち放牧慣行や農村における牛の需要と密接に結びついて初夏と秋に開かれるのが普通で、各市はお互いに密接な関連がありいわば連鎖市的性格さえ持っていた。各市市場は取扱う家畜の質及び商圈に特色を持っていた。

久世は明治15年には5月と9月に市が開かれ売買頭数は牛1,000、馬200で出雲・伯耆・因幡の牛まで集まり、販路は美作・播磨・備前・備中・讃岐・阿波・摂津・大和で、手数料1頭につき8銭であった。(農務顛末第4巻)語り伝えによると春市は近郷農村の田植時期が早くなるにつれて開市が早くなったとのことであり、そこに鍬牛(鍬のごとく農耕に使う牛の意)売買を本命とする春市の性格をうかがい得る。山間の大市の特色は何といっても放牧牛を秋山からおろした秋市にあった。久世もその例外でなく、いや最も特色ある秋市がみられたのである。久世市は開市季節・市の名称と市場との対応関係を模式化すると次の如くなる。

市の季節・名称	商 圏	特色ある取引牛の種類	特別の呼称
秋市	{ 畿内 西中国山間	成牝 成牝	東牛 西牛
春市	{ 岡山県中南部 山陰、四国	主として 明3才の牝	鍬牛

このように和牛を飼育している山村の生活と密接に結びついて、市が立ち、極めて特色ある牛が取引きされていた。以下秋市、春市と順を追って背景をなす

中国地方の和牛飼育状況との関連をみながら考察をすすめてゆこう。

一、秋市

久世牛市の中核をなすものであり、中国山地の集散市場としての特色を最もよくあらわしている。ここで取引される東牛、西牛を中心にみてゆくことにする。

A 東牛(ひがしうじ)

日本山海名物図絵に「備前備中の国おおく牛を飼いて産す、即ちこれ天王寺に送る」とある様に岡山地方から上方に牛を送っていた。それには中国山地から直接出雲街道経由で送られるものと、一度南下して山陽道を上方に送られるものがあった。関西6大市の一つとして栄えた中国山間の久世市場こそ上方へ中国山地の大型牝牛を供給していた大市であり、秋市にその典型的な市場風景がみられた。久世の秋市こそ畿内への東牛供給の本場であった。東牛と秋市を検討してゆこう。

秋市は26日間にわたって開市していたのであるが、市場へ入場する種別についてみるならば過去にさかのぼるほど牝成牛が圧倒的に多く全体の過半数を占め仔牛は少ない(第4表)。端的にいえば久世市場は秋市で代表される牝成牛の市場であり、たくましい牝牛の出入りした市場といえよう。秋市26日の最初の4日間がこうし、次の2日間は西牛、あと20日間の長きにわたって東牛が取引きされた。(第5表)。この特色を理解するためには久世を中心とする地域の和牛飼養形態をみなければならぬ。

牝、牝はほぼ同数だけ生まれるのであるが、自然的、社会的要因によって牝卓越地帯、牝卓越地帯ができる。山間地帯には牝が多く平坦部農村には牝が多い、これは山間部では力の強い牝が役用に必要であるからである。平野の多い畿内は山勝ちの中国地方の国々一生産地帯であるに拘らず一較べると牝が多いことは既に第1表で明らかにした。備前・備中・美作についてみると第2図の如く上房・真庭・阿哲・苫田・川上の諸郡では牝率が高いことがわかる。明治前期には牝牝混牧で野交尾が行われていたが、次第に牝牝混牧野交

岡山畜産便り1959.07

尾が禁示して品種改良を試みたり、肉牛的素質の増大を企てる者あるいは専ら伝統的和牛のよさを outs 出さそうとするものなどいろいろな試みがあった。それはつまり牛に対する評価、観点の問題であり、農業の発達とタイアップしたものと いえよう。牝よりも角の美しい牡を高く評価したのは世界中いづこの国も同じである (Pierre Gourou: The tropical world. M. E. Seebom: The Evolution of the English Farm) 用畜化の進むにつれて牝の評価が高くなるのである。同じ牝牛にしても役利用のみを重んずるのは農民の経済観念の未発達によるものといえよう。各種各様の牛が取引された大山牛市でも明治19年頃は牡、牝の価格が同等かまたは牡が多少高価であった。久世牛市ではずっと後までこのような傾向がみられた点にその特色がある。角は美しくなくとも大きくなる牛が東で重用され、西方では角の美しい牛が珍重されたのは農業発達のずれのためである。

備中北部は西牛をこしらえる所であり、千屋市は西方へ供給する根拠地であった。美作西部の新庄川流域の美甘新庄は東牛と西牛の両方を出す地帯であった。これより東は言うまでもなく東牛造成地帯であった。久世牛市はこのような東牛送出拠点に立地しており、北部山地の牡を役肉用牛として駒ヶ谷市へ送ったのである。

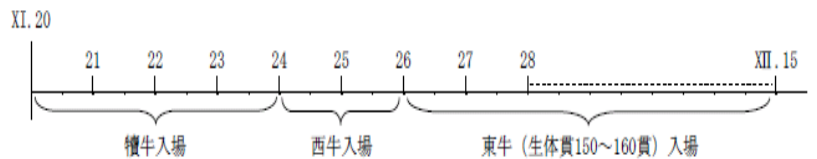
東牛供給久世牛市と、中国山地の他の大牛市場との関連をみると次の通りである。

第4表 久世市場入場頭数

	成 牛		仔 牛		馬
	牝	牡	牝	牡	
大正8年	658	2,856	(種)233	(種)248	—
昭和5年	805	1,524	703	605	9
昭和6年	667	1,327	1,177	1,070	5
昭和7年	1,100	1,822	671	769	16
昭和8年	677	1,041	1,178	1,475	19
昭和9年	—	—	—	—	—
昭和10年	673	1,223	1,071	1,155	17
昭和11年	1,347	1,393	120	580	17
昭和12年	—	—	—	—	21
昭和13年	1,151	1,160	1,189	1,605	7
昭和14年	—	—	—	—	6
昭和15年	—	—	—	—	—
昭和16年	1,181	1,014	523	1,044	20

[備考] 1. 久世家畜市場成績綴 (昭和2年起)
2. (種) は種牛の意

第5表 秋市における牛の種類別入場日



(イ) 大山秋市と久世秋市、日本3大市場の1つとして著明な大山市場の秋市は10月23日から始まり大山秋市の残り牛は11月17日より始まる千屋市場 (西牛市場) で取り引きせられ東牛向き残り牛は11月20日より始まる久世秋市に集められる。

(ロ) 出雲横田の秋市は主として西牛市場であり、終了後残りの東牛向きは久世秋市にあつまる。このように大山市・横田市・千屋市に集まる牛のうち、角目はそれほど美しくはないが頑丈な牛はみな久世に集められ、ここから畿内へ送られるのである。久世の春秋2回の市のうち秋大市が最も盛大を極め俗に“大上り”と言われ (それ以外は“合い上り”といわれ)、秋市を中心に大量にたくましい牝牛が畿内に搬出せられ久世牛馬市は春秋を通じて中国地方の牝牛を東牛として近畿へ送る根拠地だったのである。

河内国の牛馬市場は、中国山地から送られた牛の中継市場であり、錦部郡駒ヶ谷の牛市はその名が中国牛市であり美作・備中・備前の牛を取り扱って居り、古市郡駒ヶ谷の牛市は耕牛市なる名で呼ばれ、但馬・丹波・因幡・美作・備前・伯耆の牛が入場して河内・大和・紀伊・伊賀・伊勢方面へ売りさばかれたのである (農務顛末 第4巻)。

河内の大和寄りの古市郡駒ヶ谷には久世東牛を専門に取扱う南中屋の設備があったことは既述の通りである。上方博労に追われて大阪につくとここで旅装を整え、美しい着物を着せて大和に近い古市郡駒ヶ谷に到着するのである。

一方久世の商人は大和山辺郡針ヶ別所一帯には絶えず販路拡張に赴いて宣伝していたのである。したがってその地の者が久世から送られた東牛購入に駒ヶ谷に来ていたという仕組であった。高野豆腐の製造の盛んな地帯で搾り粕を食べ、いわゆる「粕喰牛」として肥育されたのち大津・伏見で車牛として働くか、あるいは一層集約的肥育牛となるかの道歩んだのである。昔は牛車を輓かせたから車牛とも言ったが、明治時代になると使役したのちは肥育して肉牛として

岡山畜産便り1959.07

売る用途がひらけ東牛の取引も多くなったのである。久世市より大阪までの上方博労による牛追い経路・所要日数は次の如くである。

久世－坪井間 1日

久世－姫路間 3日至4日間

久世－大阪間 10日間

この久世から大阪までの街道の宿場には牛のつなぎ場（牛小屋）のある博労専門の宿屋があり、牛追歌を唱いながら旅する上方博労の姿はのどかな抒情詩であった。またこの長い道中には牛の死ぬこともあった。

B. 西牛（にしうじ）

東牛に対して西牛と呼ばれる3才の牡牛は東牛に較べれば柔順で小型で、細目の上向きの新月型の角立てで、頸・肩・脚まで前身体がすぐれ器量がよく特に上向の角を有するのが条件である。いわゆる均勢のとれた男だてのある牛で西中国を中心とする備後・安芸・石見の方面の農牛用に売られその地方の相当資力のある大百姓に役牛として買われてゆくのである。備中・美作北部の牛はこうした観点から東牛向・西牛向に区別される。

久世市は前述の如く東牛を主体とする市場であり、備中千屋市・出雲横田市は西牛を中心とする市場であり、久世市場に集った牡牛は西牛と東牛に区別せられ西牛は西中国の農牛として取引きされてゆくのである。西牛の造成に主力を傾倒している千屋の農民は「大津の車牛にやるな」といい、自分の持牛を器量が悪いが故に上方博労に売られ重労働をして一生をすごす牛にはさせたくないとい意気込んで西牛を造っている。第5表に示す如く久世秋市にも西牛が若干だが東牛には比較にならないほど少数であった。

久世秋市はこのように東牛を主体とし、仔牛・西牛も取扱っていたが牡牛のウエートが重かった。北部山地は南部農村に較べて牡が多かったからである。たとえば鳥取県竹田村では日露戦争の頃まで牡を育成して久世市へ出すのが普通であった（農林省中国農試、山林経済における和牛放牧と農業経営との関連、昭和29年）岡山県の新庄村では大正中期に牡が凌驚した。かくて真庭・苫田の一带では牡が次第に多くなった（瀬戸内海研究会編 山村の生活）。このような傾向

は久世市場へ出される牡の減少となってあらわれた。

かくて北部山地・吉備高原で牝の比率が大きくなって行った。このような趨勢にあつて牡卓越地域が島嶋状に残った。奥山中（八束・川上・中和）・津山市北部のしるた地帯・美川・津田村・円城村・長田村・美穀村・本郷村・万才村などである。この地域は頑健な大型牡牛の供給地としての特色を保ってきた所であり後述する鞍下牛の供給地ともなった。

C. 秋大市と久世商店街

久世商店街にとってこの秋大市はまさに街の盛衰にかかるものであった。秋市のひらかれる10月末、11月始は米のとり入れの農繁期が終らず、従つて米の収穫代金はまだ農家のふところに入っていない。にもかかわらず冬の訪れの早い山地の人は冬支度をせねばならぬ。ところが好都合なことには、放牧的生産地帯では山より牛をおろし、生れた牛を売る時に当る（苫田郡富村の場合11月20日が牛の山おろしである。久世秋市は11月20日－12月15日）一方舎飼生産育成地帯では冬の草が少なくなるため育成牛を出す時期である。したがって久世秋市は冬支度と“牛の収穫”という2つの意味をもっている。晩秋でみぞれや雪が降り始めると久世近郷では久世秋牛市を待つて牛を出し、冬支度として衣替えの買いものに秋市の商店大売出しに秋牛市見物をおかねて買い物に出かける。牛を売る農家は男が牛を引き女がわらを持ち牛について、すなわち家族そろつて出かけて牛を売り冬物衣料を中心に家具・たんす・はきものなどを買うのである。最初にバケツを買いその中に下着・衣料・たび・はきものを買いつめ、さらに風呂敷一杯買って両手にさげて帰る風景がみられた。家族総出で出るのは売られてゆく牛に対する哀愁の念もさることながら、牛を売った金が酒とバクチに浪費されないためである。秋市の大売出しは安いので嫁入道具がよく売れた。この秋牛市に雪が降ると一層よく売れ降らないと売れ具合が悪いと商店街で言っている。昔は催物まで出て賑わつたものである。

問屋街を中心とする上町では牛市用の“牛のわらじ”“（うしんご）”“牛づな”牛に喰べさせる“粉かす”“ふすま”“ぬか”湯わかしが店頭並べられる。農家からは問屋へ婦人・子供が小使かせぎにわら売りに

岡山畜産便り1959.07

きたものである。毎年街商が津山・岡山・倉敷・新見から入り込んだ。若干おとろえたとはいえ今もこの風景は見られる。かくて久世の街は雑踏をきわめた。おもに出雲街道筋が混雑し問屋のある上町に出店・飲食店・牛市用品が並び、中町・下町は大売出しでにぎわう。この1本筋の出雲街道350m-400m間がその中心であることは、牛市の町久世の面目躍如たるものがある。

第6表のごとく、久世商店街は11月は農繁期で未だ米の収穫代金の入らないのに秋市のおかげで売上高が多いのである。一般的に言って秋祭の浪費後は普通の商店街では売上げが最も低下するのに、久世では逆に売上の増加を示し10月の秋祭、年末の売出しよりも大きい、これは全く牛市のためである。

秋市の久世地方に持つ意義を一層深く理解するために連鎖的に開かれる暮市にふれねばならぬ。備中北部から美作西部にかけて可成り広範囲に連鎖市が開かれながら久世にわれわれの知る限り暮市がないのである。暮市は旧12月の中旬と下旬にあったが今では下旬のみに縮少し、正月用品が売買され高原の村と谷方の村の間の物資交換的性格もみられる。「鰯千本、筵千束、そうき千個」というのが暮市における商いの基準であった。鰯は関西の正月用魚としてはなくてはならないもの、殊に嫁を貰った年には歳暮として嫁の実家へ鰯1本贈るのが慣例である。

筵は水田の卓越した谷方の農家が持ってきて道路端に並べて売ったのである。「百姓は筵じまい」といわれる様に筵なしでは生活がなり立たない。筵はお正月餅をならべる所から出発して最後が野筵となって終るのである。

そうきは餅搗きその他台所になくてはならぬものである。この3つを中核として各種各様の露店がひらかれて正月前の買物風景が繰上げられるのである。刑部・勝山・落合・鹿田・中津井と互市が立ちながら久世にはみられない。久世の秋の大市と露店商が客を呼ぶ風景は暮市が最も盛況を呈する中津井の暮市風景とまがらばかりである。要するに久世では秋の牛市が1ヵ月近く続き、牛の売買のみならず、近郷農村の冬期用買物までするので、他の在町にみられる暮市的性格をも兼ね備えていると言ってよかろう。なお市場集落の問題は稿を改めて述べたい。

第6表 久世町年間大売出

月	売上度合	催・大売出し名
1月	低下	旧年末大売出し
2月	低下	
3月	増大	
4月	増大	早川公祭り、春牛市大売出し
5月	おちる	たあが 田上り大売出し
6月	おちる	
7月	普通	中元大売出し
8月	少し増	
9月	増大	祭大売出し
10月	増大	
11月	増大	牛馬市協賛大売出し
12月	増大	歳の市大売出し

二. 春市

春市は主として牝牛を県内・山陰ならびに四国市場を対象に取引したものであった。春山からおろした牛を春市に出すという点で春市もまた放牧山村の生活のリズムと符合していた。「春市は百姓の耕牛の取引だ」といわれる。農耕牛として牛はなくてはならぬものであるが、年間通して牛を持ちこたえうる農家は時代をさかのぼればさかのぼるほど少なかった。

牛は古来米10俵といわれるほど高価なものであった。年間通しては牛を持ちえない農家も田植時期には牛なしではすまされない。この時だけでも買うかまたは借りたいのである。早くから犁耕が普及していた中国地方では、牛を自分で持ちえぬ者は借りたものであり、田植時期の南北的ずれ、草の多寡などがこれに絡みあって2つの型の耕土の貸借形式が自然に発生してきた。1つは高価な賃借料を支払う鞍下牛であり、他は借料支払の必要のない草牛・追上牛であった。

久世の春市にはもろもろの形態の農耕牛が県下農村の農耕需要を充すために売買・貸借されたのである。放牧山村からいけば春山から放牧牛をおろした時期であった。従って牛の収穫期と言ってもよい。この様な時期に久世の春市(6月1日から10日)が開かれたのである。時恰かも農村の田植需要期なるため農村の働き牛として久世市場から南部へ送られて行った。南部農村は牝よりも牝を使用するので(第2図)牝が南

岡山畜産便り1959.07

へ送られたわけである。これら「明け3才」の牝牛は中南部農村で育成され、そのうち若干は孕み牛となって再び久世市へ帰り、山間部へ送り返されるというコースを歩むのである。このような和牛の流通が北の生産地帯と南の育成地帯の間でおこなわれる。この様な姿は広島県の十日市をめぐってもみられ、山陽斜面で行われている一般的現象であった。これは牛の回帰的移動とってよからう。

山地の産地市場を出発した牛は成長するにつれて、経営規模の大きな農家に売られて南へ南へと移動して行くのが一般的形態である。優秀な牛は孕み牛として北の故郷へ帰るが、よくない牛はこのような回帰的移動をしないで、次の様なコースを歩む。

一般的にいて北部で生産された仔牛は吉備高原及び岡山平野北部で育成されたのち、南部平坦部の大経営の農家に送られ肥育されて、南部の牛市場から阪神へ送られる。久世市場を経由した牛は回帰的移動をするか、このように南下、そうして東上するかの道を選ぶのである。

さてこのような売買とは趣を異にしたものが賃牛・預け牛の中継ぎである。まず賃貸牛について簡単にみよう。

中国地方では一般に鋤下と呼ばれ、四国の貸耕牛、北陸の田馬などと共に、牛馬の賃貸借として代表的なものである。鋤下牛を借りる所には2つの型がある。1つは牛を多数飼育しているが牝牛を大切にするため働き牛として牡を必要とする北部山間の仔生産地帯であり、他は山が遠く牛飼育困難な平野地帯である鞍下牛供給地は地形急峻で運搬牛として大型の牡牛を必要とする山間地帯が重粘耕地で牡なくては耕作できぬ湿地地帯である。山陽側でいうなら既述の如く「山中」か吉備高原北部から鞍下牛が一番鞍として北部仔生産地帯に行き、時期的に早い田植を済まして南部のおそい田植に二番鞍として送られるのである。このような鞍下牛の移動の中継地として役目を久世春市は果たしたのである。

鞍下牛の場合は牛持ちは高原の大博労か地主である（平野に牛持がいる場合もあるが）中国山地では資産家は大概牛持であった。このような牛持は平素は牛小作に出して田植期になると牛小作人からとりあげ大体米1俵の貸料をとって賃牛に出すのである。

これに較べて草牛・追上牛と呼ばれるものは草の少ない農村の人が牛を持っていて、草と労働力は豊富だが貧しきが故に牛を持ち得ないか、夏草刈のためもう1頭持ちたいという山間農村へ預ける慣行である。この時は貸借料金は要らないし、たとえ博労が仲介しても久世市場との関係はあまり大きくなかった。しかしこの様なものが久世市場を経由していた。

春市より1ヵ月おくれて、すなわち新の7月10日頃に半夏市が開かれたこともあったらしい。半夏市は田植労働を済ませて帰ってきた古い牛を換えたり、草刈牛を売買する性格のものであった。

（筆者 岡山大学教育学部助教授）